

祖師禪と浄土教

中山 正 晃

一

印度の浄土思想と信仰は、漢魏晉六朝の時代を通じて、大乘仏教の伝来とともに各種の浄土経論に漢訳され、その研究成果が教学的体系を整える隋唐時代になつて、中国における浄土の解明がなされた。その成果として誕生したのが唐宋の各時代に現れた道綽、善導、懷感、遵式、元照などの浄土章疏であつた。これらは言わば中世における浄土の中国的受容の解明と見做されているが、これがそのまま近世の中国的展開の実体ではなかつた。ことに不立文字、教外別伝を標榜する祖師禪は、晩唐から五代にかけて南北二宗から五家七宗への発達に伴ない、教学を中心とする諸宗派との対立となり、遂には浄土を問題として、籍教悟宗を宗風とする如来禪と対決した。その結論として禪浄習合の形態をとることとなつたのである。こうした祖師禪の新しい動向は、浄土の近世的受容の実体を解明する面から、なお検討すべきものがあ

り、とりわけ禪浄習合の形態についても、五代の永明延寿の思想と行動に結びつけて考察すべきものがあると思う。

二

中国仏教史上、實際に禪と浄土が結合し、禪浄双修の形態をもつて顕著に実践されたのは、宋代以後のことである。しかるにその相關の風潮は、唐代に新しく教団を形成した禪宗の四祖道信、五祖弘忍の師弟とその門下に胚胎したと見られる。浄覚の撰した楞伽師資記によれば、道信の思想は天台止観の影響を受けたのみならず、仏心を知るための五種の禪要を説くにあたつて、観經の是心是仏の説を引証し、その仏心の実践的体得の手段として、文殊般若經の一行三昧（念仏即念心）を依用し、独自の念仏禪を提唱した。また弘忍はその修心要論（最上乘論）に、初心者が坐禪を学ぶに際して観經による觀法（日想觀）を用いることを勧めたが、坐禪の中にこうした觀法を工夫することによつて、守真心を完うしようとす

るところは師道信の思想禪風に由来するものであつた。

思うにこうした観經による觀法が坐禪法として初心者のために説かれたのは、羅什、達摩多羅以來さかんに伝訳された禪經典に、五停心觀の中の念仏觀がとくに重要な觀法として取りあげられたので、これに類する觀經の中に觀無量壽仏法が有力になつてきたものであり、かかる意味に解釈される場合には初心者もしくは機根怯弱の者が入禪のための手段として用いられたものであつたことが認められる。

中唐の法照・飛錫のころになると、四川省成都の近接地方では、弘忍門下から分出した智詵の門流にあたる処寂・無相の一派あるいは宣什の法系が伝え弘めたという南山念仏門禪宗において、引声念仏がさかんに流行している。曆代法宝記や宗密の円覚經大疏鈔三ノ下に伝えられる淨衆寺無相の大衆教化によると、これはまず初めに引声念仏を称えさせ、一氣を尽して念じ、声を絶ち念を停めてのち、無念の境地に入らしめ、心外の仏を心中にあらしめんとするものであつた。

このようにいわゆる北宗禪系統において、觀經による坐禪觀法として、觀想念仏もしくは称名念仏を撰取するに至つたことは、恰もこのころに慈愍三藏の流れをくむ法照や飛錫が念仏三昧を以て無上深妙禪門なりとして、頻りに念禪一致双修を説き、五会念仏（高声念仏）を實踐していることと合わせて、やがて禪淨習合の形態をとるべき要因と必然性を胚胎し

ていたと見るができるようである。

ところで唐の開元天宝以來、淨土教の思想と信仰に対し正面から批判論難を加えたのは、主に神秀一派の北宗禪であつたと思われる。すなわち神秀の觀心論に、經に至心に念仏すれば必らず解脱を得ると説いているのは、心に仏を正念することであつて、念と誦とは懸かに異なり、口に仏名を誦するが如きは、徒念、虚切、邪道にすぎないと言い、念は心念であつて声にあらず、相に執着して理を求めるのを排斥したのは、^③いわゆる善導らの念声は一あるいは魔觀立称の説を論難攻撃するものであつた。然るにこうした淨土往生の念仏に対する排撃は、また當時の禪宗一般の所説として、慧能系統の南宗禪の主張にも一致するものがあつた。六祖壇經の疑問第三によれば、「但心清淨即是自性」と言い、維摩經の心淨則土淨の説にもとづき、直ちに心性を看了すればそれがそのまま淨土であるとした。それゆえ念仏して淨土に往生を求めるが如きは凡愚迷人のなすことであり、禪者悟人にとつては要なきことであると主張している。これに対して慈愍をはじめ法照・飛錫・延寿などは、これら禪宗徒の主張は淨土往生の念仏の本意を誤解していると批判し、偏禪をいましめ、事理双修を勧めたが、なかでも法眼禪の正嫡たる延寿は、禪淨双修の形態をもつて顯著に實踐したところにその特色があつたのである。

三

永明延寿の代表的著作たる宗鏡録百卷が大乗經論六十余部と印度中国の聖賢三百家の言を綜合し、天台華嚴法相三宗の教学ならびに禪淨との融合を企てて、唯心の教旨を明らかにしたものであることは、宗鑑の釈門正統（卷八）に明記するところである。宗鏡録卷二十九によれば、延寿が宗となす一心は、華嚴の五教判にもとづく万有を總該する円教の一心であり、これは清涼澄觀や圭峰宗密の教禪一致の思想を承けたものであつた。然るに澄觀や宗密の思想は教禪一致にあると言つても、あくまで華嚴の一心を第一義とし、この一心の中に万法を統攝するものであつて、その教判において禪は華嚴を中心とする教内に数えたにすぎないものであつた。それゆゑ延寿は宗密の影響を受けつつも、これを不満として祖師禪の伝統をつぐ立場から、法相、起信、華嚴などに説く一心を楞伽經の如来藏唯心の義に統攝し、一心為宗の要理を以て諸宗融合の統一見解を立てたもので、この唯心の教学が実践に移されて万善同帰となり、事理双修となつたのである。

思うに延寿の万善同帰集三卷は、從來教学を中心とする諸宗派が相反する思想として争つてきたものを一元化し、戒定慧の三学を以て実践仏教への綜合帰一化をはかつたものであるが、嘗ては法眼禪の正嫡たる延寿が天台山において二本の

圖を作つたと伝えられるのも、要は万善の帰一を求めたのに外ならなかつた。延寿は万善同帰集下巻に一代仏教におけるすべての菩薩行を分けて十義となし、理事双修・權實双行・二諦并陳・性相融即・体用自在・空有相成・正助兼修・同異一際・修性不二・因果無差の十門を立てている。これらは當時の禪宗失意の徒が唯だ理に執して事に迷い、また教家の人が唯だ事に執して理に迷つているのを見て、兩者とも偏見に墮するものとなし、理事合行・禪淨双修を力説したものである。茲において延寿はこの中で最も重要な理と事の關係を禪と浄土の關係に結びつけ、禪と念仏の双修を勧めたのが參禪念仏四料揀偈であつた。すなわち「有禪無浄土、十人九蹉路、陰境若現前、瞥爾隨他去。無禪有浄土、万修万人去、但得見弥陀、何愁不開悟。有禪有浄土、猶如戴角虎、現世為人師、來生為仏祖。無禪無浄土、鉄床并銅柱、万劫与千生、没個人依怙」と言うものである。この中で延寿がとくに有禪有浄土を離るべからざる關係にあるものとして取りあげ、禪淨双修を勧めた根拠は、たとい転迷開悟するといつても禪にはなお退墮のあることを恐れたためで、それよりも仏願力の加被によつて速やかに生死をはなれ、見仏して不退の位を得れば、これに理性を明かす禪を加えて虎角の如く、現世には禪智を得て人天の師となり、來世には念仏の功德によつて仏祖となることができるとするところに眼目があつたのである。

それゆえ浄土の問題についても、宗鏡録卷十七に「心外無仏自心是仏」と言つて本性弥陀唯心浄土を説きながら、しかも本願功德力を認めて、有縁の時機正合するとき、去あり来ありとした。したがつて万善同帰集上巻にも、とくに自力に堪えざる根機怯弱の衆生は他力に依らねばならぬ旨を強調し、末世における時機相應の法としてはまさに浄土の一門こそ通入すべき路であると力説している。ことに念仏の実修については、諸経を引いて声の価値を説き、懷感の群疑論や飛錫の念仏三昧宝王論を取りあげて高声念仏にその三昧を成就する功のあることを明らかにして、理に即した事の方面から称名念仏を修し、浄土に往生することを勧説している。

このように延寿は唯心の教学を根柢として理事合行・禅浄双修を説くとともに、理に即した事の方面から称名念仏を修し、西方浄土に往生することを勧めているが、またとくに高声念仏を策励し、而も万行を廃することなく、これを廻向して西方浄土に往生するのが正しき禅定であり、これが聖教に契合した仏の禅定であるとして、禅定と称名念仏の一致双修を説くところは彼延寿の禅浄融合の思想における根本的立場を示すものであつた。

四

我国の法然上人源空は、中国の浄土教を三流に甄別して偏

依善導の一流を撰択する立場をとつた。このことが我国の浄土教信仰が二者択一の純粹化の一路をたどり、浄土宗から諸派に分裂していく傾向をとり、中国の浄土教が宋代以後蓮社として、諸宗の実踐行儀として諸宗の中に融合していく大きな分岐点となつてゐる。

延寿の浄土思想は、その著万善同帰集にしばしば浄土慈悲集を引いて、禅浄融合・諸行往生の論旨を説くところから、唐の慈愍三蔵の思想を受け継ぐものであつたことがわかる。また彼延寿は、宗鏡録において、天台、華嚴、法相などの各宗教との融合を企てているが、これは隋唐諸宗派の分立が戒定慧の三学によつて実践仏教へと綜合帰一化されていく時代の推移に応えたものであり、この諸宗融合の統一的理解がやがて近世における中国仏教の時代思潮となるのである。それは教禅一致・禅浄融合・諸行往生の思想教学が仏教で説くさまざまな実践行儀に優劣是非の価値判断をくださず、これらすべてを浄土往生の実踐行儀としてみとめていくところに浄土教が諸宗の実踐行儀として禅教律の三宗に共通する基盤を有していたことが看取されるのである。

1 小川貫式教授「浄土」のシナ的受容の問題（『仏教文化史研究』所収）

2 敦煌出土修心要論（『禅思想史研究』第二・三二〇頁所載）

3 「観心論」（『校刊少室逸書解説』附録・第二篇・二二四頁）

4 「浄土指帰」巻上・法相門第三、永明料揀